

## 台方宮代遺跡（2）

—海より仰ぎみる古の想い—

囑託調査研究員 仲村元宏

囑託調査研究員 川島裕毅

### 遺跡の立地と調査の概要

台方宮代遺跡（2）は成田市の南西側、印旛沼に注ぐ江川の下流、標高16～25mほどの台地上に立地している。遺跡のある江川の下流は、谷が複雑に入り込み、木の枝が伸びたような細長い台地が連なる特徴をもっている。遺跡のある台地もそのうちの1つで、麻賀多神社の奥津宮のある辺りから段丘状を呈しており、標高をしだいに低くしながら西に伸びている。遺跡がある辺りの地山は、よく知られている関東ローム層ではなく、鉄分を多く含む橙色の砂の層で構成されている。

調査は、台地の先端部分3,176㎡を対象に、平成21年11月から平成22年3月まで行われ、調査の結果、後述する古墳3基のほか、弥生時代～平安時代にかけての竪穴住居跡8軒等を検出した。

### 1号墳

1号墳は調査区の東側尾根上にあり、墳丘部分の規模は南北25m、東西21mで、見かけ上の高さは4m程の円墳である。しかし盛土は、旧表土と考えられる黒褐色土の上に最大で1m程しかなく、裾から周溝部分にかけては地山を削りだして整形していることが確認できた。

周溝は全周せず、谷に面している南側では確認できなかった。幅は、一番残りのいい東側部分で6.8mになる。深さは全体的に浅く、外側の立ち上がりが確認できないところも見られた。

被葬者を埋葬した場所である主体部は、墳丘の中心よりやや東側、墳頂部から40cmほど掘り下げた所で2カ所見つかっている。2カ所とも長軸のラインが北東に傾いた長楕円形をしており、この部分に木の棺を納める「木棺直葬」という埋葬方法であっ

たとみられる。

南側にある1号主体部は、長さ3.7m、幅80cmで、中から鉄製の直刀、滑石製刀子と白玉が見つかっている。北側にある2号主体部は、長さ5.25m、幅98cmで、中から滑石製の石枕、刀子、白玉、鉄製の直刀、剣が出土している。

石枕は長さ、幅ともに26cm、高さが約8cmになる。頭が置かれた部分の外側に高縁と呼ばれる段を1段持ち、立花と呼ばれる飾りを取り付けたと考えられる孔が7つあいているが、1号墳の主体部からは1点も立花は出土していない。また裏側には、頭と首を載せる部分を荒く彫った段階で、なんらかの理由で放棄した跡が残されている。石枕は2号主体部の北東側から出土し、この部分に被葬者の頭部があったと考えられる。また石枕のすぐ側、肩から足にかかる辺りから、長さ90cm程の直刀が切っ先を頭とは反対の方向に向けた状態で出土している。そして、頭と胸の辺りから滑石製刀子が、また胸の辺りを中心に滑石製の白玉が見つかっている。

### 2号墳

2号墳は調査区の西側、1号墳から西に伸びる尾根上にあり、標高は墳頂部で21mである。墳丘部分の規模は南北約7m、東西約6mで墳丘の盛土は最大で40cmほどである。周溝は全周せず古墳の東側、尾根部分からのみ検出しており、他の部分は谷や崖になっている。周溝の幅は最大で5.5mである。周溝の形状から方墳と考えられる。

主体部は3カ所見つかっている。墳頂部にある1号主体部は、長さ推定1.3m、幅1.1mの長方形を呈しており、1号墳の主体部とは様相が異なる。中からは、濃いコバルトブルーの色をしたガラス小玉が

少量出土している。2号主体部は古墳の北西側、北に向かって伸びる尾根上にあり、規模は長さ2m、幅86cmの長方形をしている。遺物は、主体部の底面付近から滑石製の白玉約400点が出土している。また、周溝内からも白玉や琥珀製のなつめ藪玉などが出土している場所があり、掘り込みが明確ではないものの、主体部があったと考えられる。

### 3号墳

3号墳は、2号墳からさらに北へ伸びる標高16m程の細長い台地の先端部に立地する。地形による制約からか、南北にやや長い楕円形を呈した円墳である。墳丘部分の規模が南北で約17mになる。墳丘部分の見かけの高低差は1m程であるが、墳丘盛土は墳頂部付近では旧表土から60cm程で、裾部分は1号墳、2号墳と同様に地山を削り出して整形している。周溝は、古墳の南側でしか見つかっておらず、幅は最大で5m、深さは約40cmになる。底近くから須恵器のはそう甕が出土している。

主体部は1ヵ所、長さは3.75m、幅は1.8m、東西に長い楕円形の掘り込みがある。中からは青銅鏡や、長さ80cmの鉄製の直刀、2号墳と同じ濃いコバルトブルーの色をした100点以上のガラス小玉、そして須恵器の甕が見つまっている。

須恵器の甕は主体部の東端からほぼまとまった状態で出土した。しかし、完全な形ではなく口縁や胴の部分は大きく欠損しており、破片の中には人為的と見られる強い衝撃によってできた割れ口がある。

鏡は主体部の西側から、鏡面を上にした状態で出土した。直径は9cm、厚さ約1mm、重さは80gになる。外側の区画には鋸歯文および複合鋸歯文が施され、内側の区画には、中央にあるちゅう鈕とよばれるつまみを中心に7つの乳があしらわれており、そのまわりに乳を囲むような細い線が描かれている。このような文様をした鏡は「乳文鏡」と呼ばれている。

### まとめ

以上、3基の古墳について概要を述べてきた。出土遺物等から、概ね4世紀の終わり頃から5世紀半

ばにかけて、古い方から2号墳、1号墳、3号墳の順に造られたと考えられる。

本遺跡を含めた江川下流の台地では近年、相次いで古墳の発掘調査が行われている。本遺跡の東側にある船形手黒遺跡では、墳丘部分の直径が約25m、高さが2.2mの5世紀半ばの円墳から2ヵ所の主体部が見つかり、石枕、石枕に取り付けた立花、白玉等の滑石製品、ガラス製の勾玉・小玉、青銅鏡のほか、剣、直刀、斧、鏃といった鉄製品が出土している。

また、船形手黒遺跡と台方宮代遺跡(2)の間、標高22~30mの細長い尾根上にある台方宮代遺跡でも5世紀前半と考えられる方墳1基が見つまっている。墳頂部にあった主体部からは、鉄剣、滑石製有孔円板・白玉等が出土している。

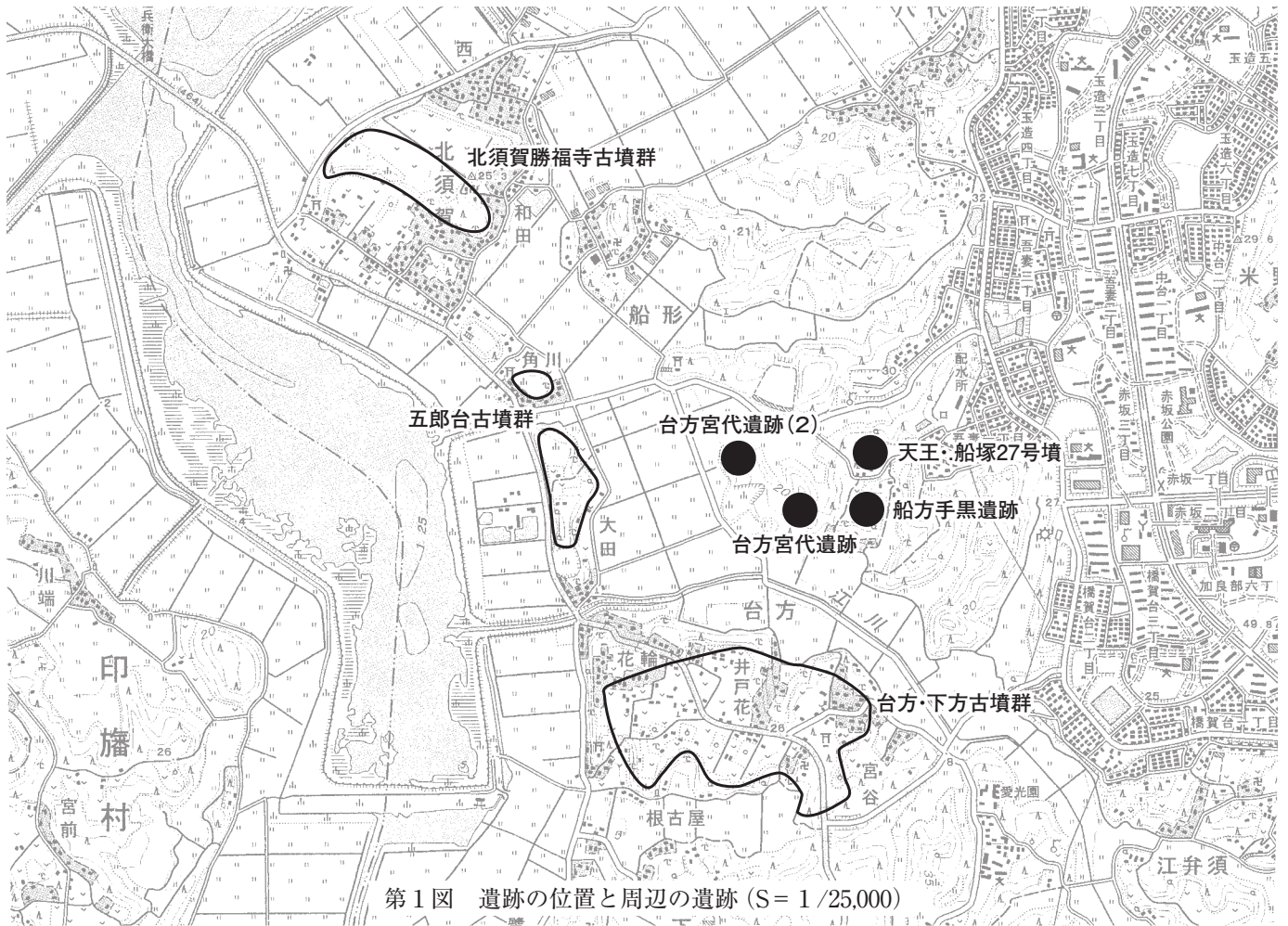
これら古墳は台地の縁辺、または細い尾根の上につくられており、現在は水田が広がっている低地部分から、古墳を眺めると、小高い山のような立派な姿を見ることができる。当時の人達もこのことを意識して古墳を築造したのであろう。

当時この辺りは印旛沼と霞ヶ浦などが一緒になった「かとりのみ香取海」という大きな内海を形成しており、遺跡の近くまで水辺が迫っていたと考えられる。

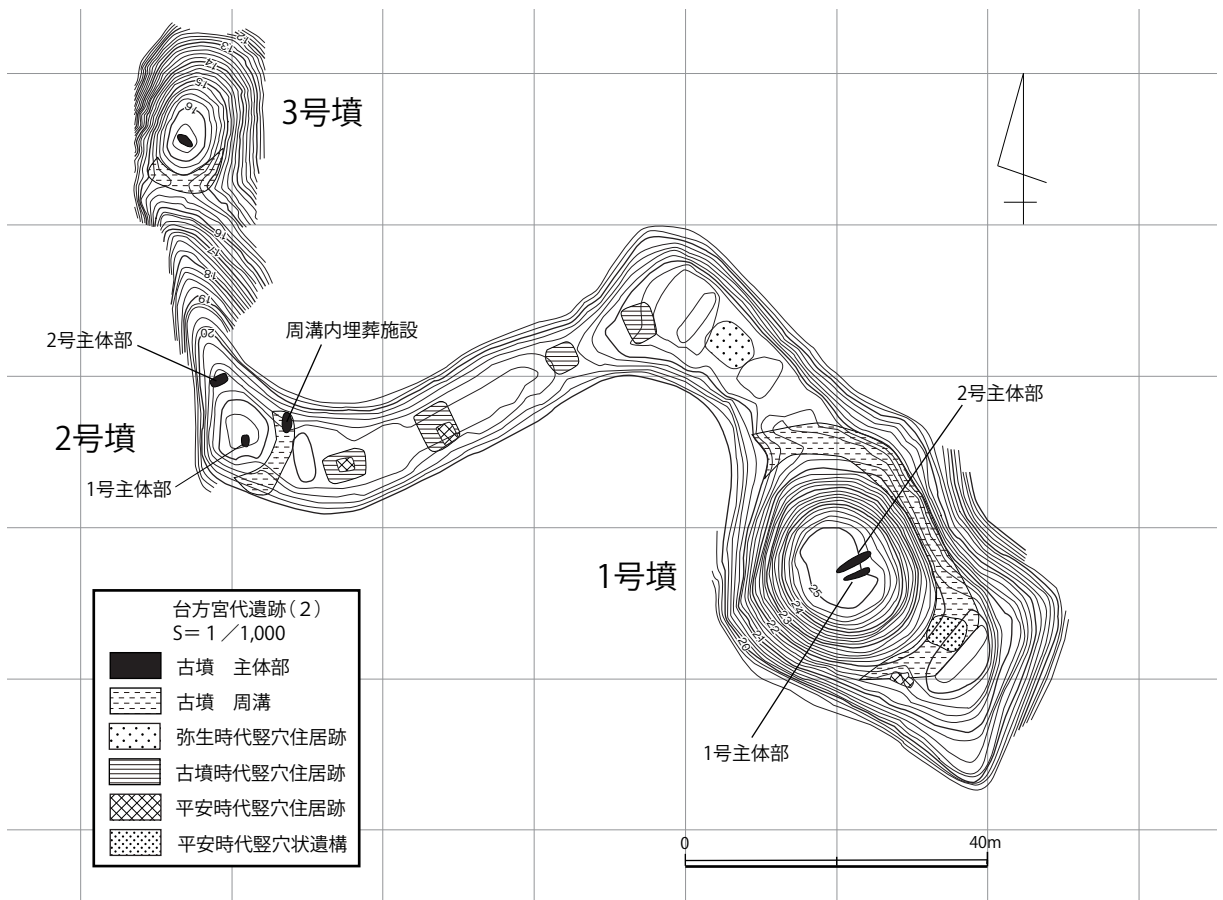
調査事例はないが遺跡の西側、印旛沼に程近い独立丘上には、10基の古墳で構成される北須賀勝福寺古墳群や円墳6基で構成される下方五郎台古墳群などの古墳群が存在する。さらに江川の対岸には9基の古墳で構成される台方・下方古墳群があり、その中の下方丸塚からは、画文帯神獸鏡を含む4面の鏡が出土したとされている。

このような「香取海」を意識した地に、古墳を築いたのはどのような人達であったのだろうか。

今回のものも含む近年の古墳の調査成果は、公津原古墳群や、竜角寺古墳群を中心とした印旛沼東岸地域の古墳群の成立・展開について、一石を投じるものと言えるだろう。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)



第2図 遺構配置図





調査区空撮



低地から見た1号墳



1号墳主体部



2号墳



3号墳



3号墳主体部 遺物出土状況



1号墳出土石枕



3号墳出土鏡